Pula! Botswana!! (前編)

工藤　得正

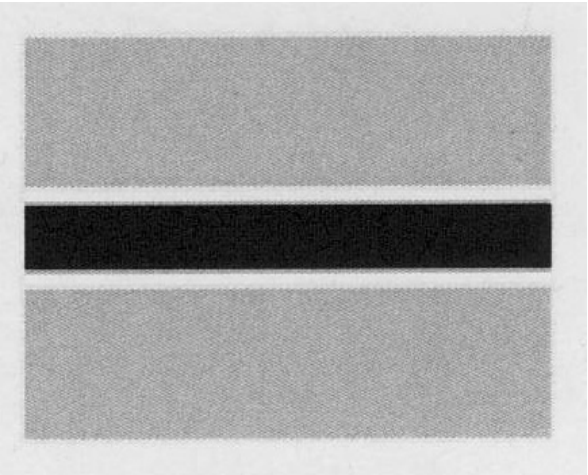
１．はじめに

このレポートは、平成 10 年から平成 12 年（1998～2000）までアフリカ南部ボツワナ共和国の JICA 青年海外協力隊であった当時の活動記録を記述したものです。土木・環境技術助言の活動をベースに、いくつかの経験を 2 編に分けて記述しますが、約 14 年前の古い資料であるため、気軽に読んで下さい。

私の宝物といえば「全世界の人々の繋がり」です。その宝物は、この赴任中の活動を通してお世話になり、今でも交流のある心温かいボツワナ共和国の住民の皆さんと、技術助言指導の活動に協力していただいた関係者の皆様なのです。

表題である「Pula! Botswana!!（乾杯!ボツワナ!!）」について、少し説明しますと、「Pula」とは、母国（Tswana）語で「雨もしくは水」を指します。ボツワナの砂漠気候では、雨・水が貴重なものと位置付けられており、乾杯の時には必ず使われる言葉です。また、ボツワナの貨幣単位も Pula です。

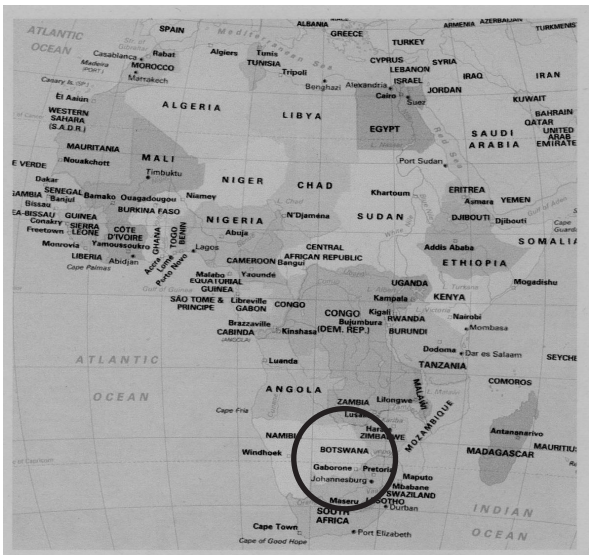
２．任国の紹介



図―１ボツワナ共和国の国旗(グレー部が水色)

ボツワナ共和国は、南部アフリカの内陸に位置（南緯 18 度～27 度）し、1966 年に英国から独立した国である。国土面積が日本の 1.6 倍の 60 万 370 ㎢で、世界 44 位にあたる。総人口は約 200 万人(2011 年現在)であり、1 人当たり GDP は、1 万 4,800 ドルである。（日本は、約 4 万ドル。）

首都は、ハボローネ（Gaborone）で人口は約 23 万人（2011 年現在）である。基幹産業は、鉱業（ダイヤモンド）、食肉加工業と観光業である。特に観光として、国立公園・動物保護区などで Eco-Tourism が盛んで治安の良い国でもある。ところで、約 30 年前？Bushman 放浪記の映画があったが、当地ボツワナ共和国民（コイサン）族を題材にしたものである。



図―２　ボツワナ共和国の位置図

３．任国での活動内容

主な活動業務の内容は、以下の２つであった。

第１は、カラハリ砂漠砂の土木・建築資材

の実用化

第２として、食品化学研究所建設の設計・積算・監督

１）カラハリ砂漠砂の土木・建築資材の実用化

当時の首都近郊では、ある程度の基盤整備は施されていたが、それより地方のすべての住居は「ハット」と呼ばれる、泥で造られた脆弱なものであった。

年間降水量が、200mm～300mm の砂漠気候でも集中豪雨があれば、家屋は損傷してしまう。そこで、Economy-Ecology(経済的環境的地産地消)の配慮とその観点から現地のカラハリ砂漠の砂を利用して、泥よりも強度のある土木・建築資材の実用化を試みた。

まず、実用化にあたりカラハリ砂漠の砂の物理的・化学的物性値を把握するため、JIS 規格を基に整理をしなければなかった。

British Standard では、大まかな試験事項の記述のみであったためである。だが結果は最良の製品を作ることができた。ゴール（成功）へ辿り着くまでには、アフリカ大陸の南部を東奔西走しなければならないとは、思いもしなかったので、詳しくは後編で記述したい。

さて、カラハリ砂漠について若干の概略を説明します。約１億 3,500 万年前、ゴンドワナ大陸が分裂し始め、およそ１億年前には、アフリカ大陸が孤立してしまった。その後まもなく３盆地（Basin）（北部：チャド、中部：コンゴ、南部：カラハリ）が形成された。特に、カラハリでは、約 6,000 年前、周囲の頂部高地の風化によって砂状物質が盆（くぼ）地部へ流入したものである。このカラハリ盆地は、北はザイールの熱帯雨林帯から南の南アフリカ共和国内のオレンジ川流域までの広範囲を占めている。砂漠の砂厚は、浅い所は 5m、深い所で約 200mにも達している。

図―３　カラハリ砂漠砂の土木・建築資材の実用化プロジェクト説明状況

（アフリカ中南部各国の建設大臣および大使へ説明。彼らは、コストパフォーマンス及び循環型社会資本整備に興味があった。）

２）食品化学研究所の建設

ボツワナ政府は次期基幹産業として食肉（主に牛肉）業の育成を模索していた。そこで政府は、食品衛生の環境を重視して食品化学研究所の建設地を首都郊外に決定した。

この研究所の建設計画、設計、積算、施工管理およびプラント制御操作を多国籍の関係機関と共同作業をし、建設着工となった。

大変な苦労の末、竣工にこぎつけたが、American、British、German、SouthAfrican、Netherland、JapanStanderd、の基準が合いまみれる建設であった。

図―４　食品科学研究所の建設状況

（この研究所はベルギー・アニメ・タンタン好きのベルギー人がデザインをし、虫を題材に設計。

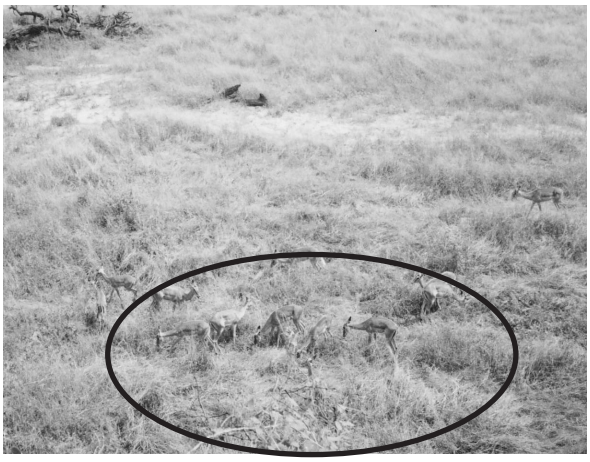
上空からは空飛ぶカマキリ。手前の白パイプは、ムカデの足をイメージしている。）

４．刺激的な経験

１）Episode-1（食生活）

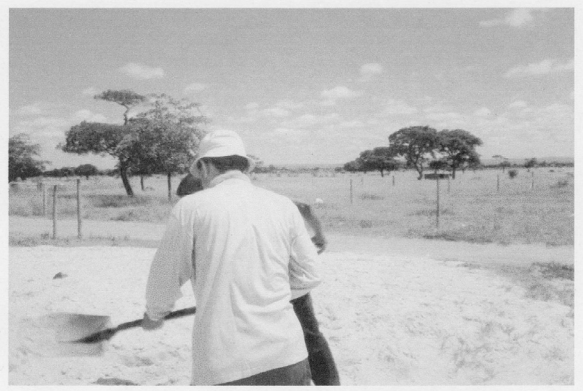
ボツワナの食事は、いたってシンプルである。とうもろこしの粉をお湯でとき、大きな蕎麦掻状にしたものが「パパ」である。一般的に肉は鶏肉、牛肉、豚肉そしてインパラの肉であるが、特にインパラ肉のブラウン・シチュー（Stew）は美味しく、インパラをチーターやライオンたちが好んで捕食するその気持ちがちょっぴり理解できる。

また、どぶろくビール（チブク）と乾燥芋虫（パニ）は格別であり、造り方についての説明は、ここでは省略するが、またチブクを飲みたいものである。



図―５　インパラの群れ

２）Episode-2（危ない砂の採取）



図―６　カラハリ砂漠砂の採取状況

（向こうには、象・キリン等が見える）

図―７　砂採取付近の状況

（なぜかそばにライオンが。隙あらば餌となる。）

地質マトリックス（母体）が数種のカラハリ砂漠砂の現地採取のため、広大サバンナをハンター同伴で駆け巡る。安全と思い無防備でジープから降りて、砂の Sampling 作業をしていると、背後から不意にガブリとやられてしまう恐れは、おおいにある。

３）Episode-3（私の同僚）

ボツワナ共和国大蔵開発計画省技術開発研究所に席を置き、建設関係の技術指導を行った。同僚はまじめで、かつ、ユーモアいっぱいであった。彼らは替えがたい友であり、一緒に仕事ができたことを誇りに思う。

彼らはダンスが好きで、夜の 10 時から朝の５時までつき合わせられることは度々あったが、他に娯楽が少ないためか、よい気分転換をすることができた。

図―８　いつも支えてくれた同僚

５．むすび

この前編で私の経験してきた内容は、専門家や他の JOCV-OB および読者のみなさんは、すでに体験されていることと思いますが、私にとっては非常に刺激的であり、貴重な宝物です。まず、日本では絶対に経験できない生活、文化、人々の様々な考え方がここにありました。

そこで、日本の良さや配慮を要するところを学んできましたが、一読された皆さんは、もし、チャンスがあれば、Volunteer で世界へ羽ばたき、外から日本を再度見つめ直して欲しいのです。間違いなく、日本・北海道の原動力となると思います。

また、この度、体験記を述べる機会をつくって下さった北海道インターナショナル協議会（HIC）の皆様へ感謝します。

次回の後編も乞うご期待！

サバンナ風景

後編のひとコマ： Seven Sisters という名のバオバブの木（カラハリ砂漠内）

（「星の王子様」のサン・テグジュペリも羨むバオバブ。

砂漠砂の採取で偶然に発見し、このバオバブを見たものは・・・。）

後編のひとコマ：ケニア・ナイロビ大学正門。

（アフリカのハーバード大学と言われる最高学府。カラハリ砂漠砂の土木・建築資材実用化で学識者へ会いにいった時の画像。まさか学長と打合せできるとは・・・。）

高齢化社会を見据えて

百瀬　治

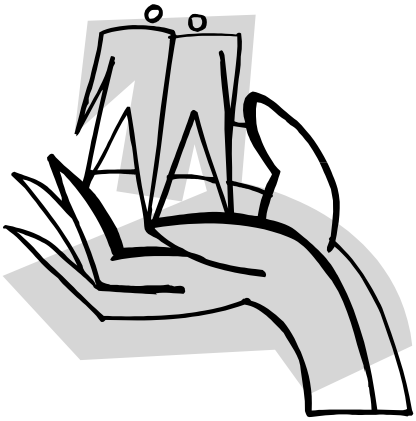
平成25年9月に母を札幌に呼び寄せました。母は長野県松本育ちで、90 歳になるまで一度も松本から出たことがありません。75 歳で父がなくなってからは一人暮らしとなり、80 歳を過ぎて体力が衰えながらも、近所の人達に支えられて過ごしておりましたが、自分の身の回りのことが十分にできなくなったこともあり、札幌の私達夫婦で引き取ることになりました。松本を離れたことのない母には札幌に移り住むことに対して大きな抵抗感がありました。「とりあえず、1ケ月間だけ札幌に住んでみよう」とだますようにして連れてきました。その後、札幌の暮らしにもすっかり慣れ、近くの施設のデイケアーサービスを受けるなど元気に過ごしています。これまで老人介護を自分のものと意識しませんでしたが、母と一緒に暮らすことになり身近なものとなりました。母の健康状態によりますが、しばらく私達と一緒の生活ができそうです。母は90歳になってもこれからの人生を考えると、先々私達に迷惑をかけるようになることが心配であるといっています。

団塊の世代である私は、昨年65歳になり高齢者の仲間入りをしました。高齢化は急速に進み、札幌市の人口は2005 年の190 万人（65 歳以上 33 万人)が 2035 年には 176 万人（60 万人）となり、65 歳以上の高齢者がおよそ27万人も増加するとの試算があります。

高齢者の生活を支える年金、介護保険、医療保険については、今後の高齢者の急増と現役世代の減少により、いずれの制度も財政的に破綻し、今のままでは成り立たたなくなるという高齢者にとって厳しい報告もあります。本当にそうなってはほしくありませんが、現役や孫子の次世代に過度の負担をかける現在の制度が、いつまでも継続していくことには無理があることは理解できます。政府は年金制度を維持するために「税と年金の一体改革」に取り組んでいますが、どうなるのでしょうか。これらの制度はすぐには破綻することはなく、高齢者と現役世代との負担を調整しながらも継続していくことを期待しています。しかし、現在のように恵まれた状態ではなくなるでしょう。そのときは人事を尽くして天命を待つという心境になり、腹をすえて必要以上に悩むことなく過ごす覚悟をするしかないでしょう。

2011年の世界194力国の平均寿命ランキングは、1 位が 83 歳の日本、スイスなど、73 位が 74 歳のタイ、マレーシアなど、118 位が 65 歳のラオス、カンボジアなど、181 位が 53 歳のナイジェリアなどであり、中央値は73歳、平均値は70歳です。

90 歳の高齢者が老後の心配をする日本のこの恵まれた状況の維持継続と開発途上国を日本並みに改善するという難題を如何に解決するか。永田町の国会議員の先生と霞ヶ関の優秀な官僚の皆さんがよい解決策をみつけてくれることを祈るしかないのでしょうか。



ソロモン滞在記

宮下　妙子

昨年１月初めから９ヶ月間、JICA のシニアボランティアとして、赤道直下の国、ソロモン諸島に行ってきました。業務は、ソロモン国立衛生試験所で水質試験のノウハウを指導することでした。

ソロモンについてのガイドブックはひとつもなく、最後の秘境といわれているような所ですから、日本ではあまりよく知られていないと思います。在任中の実情などエピソードを交えて、ソロモンを紹介します。

ソロモンの秘宝

ソロモン諸島は、インドネシアの東方にあるパプアニューギニアよりさらに東にあります。大小あわせて 1,000 以上の島々からなり、人口は約 50 万人の島国です。

35 年前にイギリスから独立しましたが、今でも英国連邦に属していて、国の元首はエリザベス女王ということです。ですから公用語は英語で、現地語はピジン語といって英語がなまったような言葉を話しています。

ちなみにピジン語で、「おはよう」は「mone モネ」、「ありがとう」は「tanggio tumas タンギョトゥマス」で、やっぱり英語がなまっているという感じでしょ！自分のことは「mi ミィ」なので、「おそ松くん」のイヤミが話しているみたい。読み方はまるでローマ字読みです。

ところで、ピジン語の“時”を表す言葉に、午前中とか午後、真夜中等の他に、「kokorako krae ココラコクラエの時」というのがあります。Kokorako は鶏、krae は cry から来ていて、「鶏が鳴く時」ということで、午前３時から５時までの間を表しています。ここに来て最初の日、鶏が鳴くので目を覚ましたところ、午前２時半でした。「話が違う！」と思いましたが、次の日は午前３時。「なるほど！」と思ったのですが、その次の日は雨で、午前６時頃にならないと鳴きませんでした。目覚まし代わりにしようかと思っていましたが、あまりあてにはならないようです。

ソロモンという国の名の由来は、金鉱が発見され、それがソロモン王が隠した秘宝ではないかということから名付けられたという話が伝わっています。実際、私の業務も金鉱山からの汚染水の分析が大きな課題となりました。ソロモンに行く前、「ソロモンの秘宝が見つかったら知らせるから。」と友人に触れまわり、友人達も「その時はすぐに駆けつけるから。」と言っていたのですが、９ヶ月間、ついに秘宝を発見することは出来ませんでした。

ソロモンに着きました！（同期の仲間と）

首都ホニアラ

国の中心はガダルカナル島で、この島に首都ホニアラがあります。ホニアラには約５万人が生活しています。ホニアラというのは、「南東風の吹くところ」という意味だそうで

す。そのように言えば気候がよさげに聞こえ、友人からも、「今頃はヤシの木陰でお昼寝でもしているのかな。」というメールが届いたりしましたが、JICA 事務所の調整員の方から、「ヤシの木陰で昼寝をするのは、死を覚悟して。ヤシの実が落下する恐れがあります。」と釘をさされていたので、ヤシの木には近づかないようにしていました。

ソロモンでは、首都であるホニアラですら、デパートもなければ、映画館もありません。信号もなければ横断歩道もありません。オーストラリア人が行く、こじゃれたカフェが数件ある程度。（失敬！横断歩道が１か所だけありました。ペンキがはげて横断歩道とはっきりわからない状態でしたが、一応、歩行者優先でした。）それでも、私たちは仕事があるので、まだ退屈しないのですが、随伴で来ている奥様達の中には、「孤独死しそう！」と嘆いている方もいらっしゃいました。

海はありますが、砂浜にいるサンドフライというブヨみたいな小さな虫に刺されるのが怖くて、最初の頃は近寄ることも出来ませんでした。

以前の赴任地であるタイやインドネシアでは、ずーっとホテル暮らしをしましたので、ソロモンでもホテルに住もうかなと思っていたのですが、ソロモンでは、住宅費とレストランでの食事代は異常に高いです。行ってすぐ滞在したホテルはキタノメンダナホテルといい、日本人経営のホテルですが、１泊１万円近くするうえ、朝食はついていなくて、食べると 1,000 円以上かかります。昼食もカフェ等で外食すると 1,000 円位かかります。

９ヶ月間のホテル滞在は費用がかかりすぎると、JICA 事務所の方がお勧めする台所付のサービスアパートメントを見に行きましたが、部屋の中をネズミが走っているのを見てゾーッとして、却下。幸い、私より３か月前に来ていた長期のシニアボランティアの看護師さんが「部屋をシェアしませんか？」と言って下さったので、そちらに住むことにしました。きれいな家だし、職場から近いし、海が見える高台にあり、とてもいい環境でした。夕方、ヤシの木の向こうに夕日が沈んで夕焼けになると、「南の島に来た！」と感動しました。二人で、自炊していたので、日本にいるのとほとんど変わらない食生活が出来ました。

慰霊の島―ガダルカナル島―

ガダルカナル島は、第二次世界大戦の戦場になり、日本軍と米軍が激突したところです。日本の兵隊さんが何万人も亡くなっています。戦闘で亡くなった人の数より、飢えと赤痢やマラリアで亡くなった人の方が多いそうです。引き上げ船の近くまでたどり着いても、沖にいる船まで泳いでいくことが出来ず、浜で自決した兵隊さんも沢山いたそうです。

ソロモンに着いた１月は一番暑い時期でしかも雨季。毎日雨で、じとじとして、マットもシーツも濡れていて、気持ちが悪く眠れない時は、「戦争で死んでいった兵隊さんの苦労はこんなものではない、ジャングルの中で雨に当たったり、かんかん照りでぐったりしたり、蚊にさされてマラリアになったりで、本当に大変だったのだろうな。」と、そんなことばかり思っていました。

戦争中、海に沈んだ輸送船鬼怒川丸の残骸

ソロモンには、毎年お盆の頃、遺骨収集団がやってきます。1週間位ソロモンに滞在し、日本兵の遺骨を収集し、洗骨して、焼いて、日本に連れて帰るのですが、今でも、毎年百体以上の骨が収骨されています。

キタノメンダナホテルに泊っていた時、仙台からいらしたおばあちゃんとお話をしましたが、ご主人がガダルカナルで生き残って、毎年、慰霊のためにこちらに来ていたのだけれど、昨年お亡くなりになり、「戦友と一緒に眠りたい！」と希望していたので、「散骨に来ました。」とおっしゃっていました。お骨を日本に連れ帰る人もいれば、日本からソロモンに散骨に来る人もいて、複雑な思いがしました。

ホニアラ市内にある博物館で、第二次世界大戦のコーナーに、「これは私たちの戦争ではない。アメリカと日本の戦争だった。」と書かれていたのにも考えさせられました。でも、ソロモンの人も第二次世界大戦の犠牲になったはずなのに、対日感情は悪くなく、むしろ、親日的であることに驚かされます。非常に友好的で、日本人であることがわかると、途端に笑顔になるし、路上で出会うと、「モーニング」「イブニング」とにっこり笑って挨拶してくれます。JICAのことは国中の人が知っていて、JICAはボランティアとして確かな実務経験者を派遣し、親身になって活動してくれると、日本人に信頼感と好感を持っていました。

カラフルな人々

ソロモンの人達の第一印象は、カラフルな人達ということでした。真っ黒い人、褐色の人、金髪の人、黒毛の人と実にカラフル！ソロモンの人は一見怖そうな顔をしていますが、とても愛想が良く、路上で知らない人に出会っても、ニコッと笑って挨拶してくれます。

男性は、Ｔシャツに半ズボン、女性は、Ｔシャツかブラウスに膝丈位のスカート、草履履きか裸足というスタイルであまり貧富の差は感じられません。私はマラリアが怖いので、朝、夕、手足に蚊よけクリームを塗り、毎日、長ズボンをはいて職場に行っていましたが、こちらの女性で、長ズボン姿はほとんどみかけませんでした。バスに乗った時に、隣に座ったオバサンから、「寒いのかい？」と聞かれてしまいました。

民族衣装的なものはなく、インドネシアで作ったようなセクシーなドレスをおみやげに作ってくるというような楽しみもありません。親しくしていただいた大使夫人にその話をしたところ、夫人は、「元々が、裸族だからでしょうね～。」とおっしゃっていました。ちょっと前まで、腰ミノ姿で、自給自足の生活をしていたところです。

ソロモンの人の主食は、以前はイモだったようですが、今はお米です。そして海外からヌードルが入ってくるようになったので、ヌードルライスで済ますことが多いようです。炭水化物の摂りすぎで、糖尿病になって足を切断し車イス生活をしている人を多く見かけました。

ソロモンでは、人口の95%がキリスト教です。３月末のイースター休暇に、職場のキムさんという女性に招待されて教会に行ってきました。女の子がタンバリンを鳴らすやら、生バンドでゴスペルがあるやら、寸劇があるやらでたいそうにぎやかなものです。キムさんは、教会の中でリーダー的な存在のようで、合唱の指揮をとっていました。「天使にラブソングを」ののりと言いたいところですが、ソロモンの人はシャイなので、あれよりはかなり控えめでした。お説教は、ピジン語だったのでよくわかりませんでしたが、キリストの奇跡のお話だったようです。身振り手振り

が入り、皆、げらげら笑って聴いていました。落語かお笑いを聞いている感じ。それでもやはりお説教なので、時々、「ハレルヤ！」の声がかかり、それに皆、「エーメン！」と和していました。映画館もない、デパートもないソロモンの人にとっては、教会に行くのが唯一の娯楽でもあるのかなと思いました。

ソロモンの人達との交流

９ヶ月間という、私にとっては長期間の滞在だったので、様々な行事に参加させていただき、若い JOCV のみならず、大使館の方やあちらに滞在する日本人とも親しくなり、ソロモンの人達との交流もでき、結構面白い人間関係を築くことができました。

行って間もなく、２月に地震がありました。私が住んでいた首都ホニアラに影響はほとんどありませんでしたが、震源地の近くのテモツというところでは、被害が大きく、津波で亡くなった方もいました。日本から、救援のため、船便でダンボール 400 箱の衣類が送られてきました。ユニクロがかなり提供してくれたのと、日本テレビの 24 時間テレビの黄色いＴシャツも 150 箱ありました。テモツは人口の少ない所ですから、そんなに大量の衣類は必要がないので、一部はそのままテモツに届け、大部分はホニアラで販売し、そのお金で必要な物資を援助することになりました。私も販売担当を受け持ち、ソロモンの人達と一緒に２日間立ちっ放しで売り子をしました。日本の衣料品はとても人気があり、飛ぶように売れました。ホニアラ中、日本テレビの黄色いＴシャツであふれるのではという恐怖も感じながら・・・。かなり疲れましたが、貴重な経験でした。ホニアラの街を歩いていて、その時に知り合ったソロモンの人達に声をかけられたりしたのも、うれしいことでした。

24 時間Ｔ-シャツを着た売り子仲間

６月には、大使館主催の日本文化紹介のイベントがあり、お習字コーナーのリーダーを任され、ソロモン人の名前をかなで筆書きしてあげました。日本の文字に興味を持ってくれたのか、コーナーの前には、長蛇の列が出来ました。希望者全員に書いてあげたかったので、予定時間をオーバーして、汗グッショリになって一生懸命書きました。でも、翌日の新聞に大きく載ったのは、味のある字というべきか、へたくそな字を書いていた男子青年海外協力隊２名の写真でした。

良く出来ました！（日本語教室の子供達の作品）

帰国直前にも、大使館の書記官の奥様が開いていた「日本語教室」の小さい子供達にお習字を教える機会がありました。筆で大きく字を書くのが楽しかったようで、２時間、飽きずに書き続け、立派な作品ができました。

ソロモンでのお業務

ソロモン国立衛生試験所といっても、職員は３名しかいなく、化学分析担当者は、私のカウンターパートのデビット１人だけです。何事にもスローテンポな国です。ここでの私の第一の業務は、前任者が立ち上げた重金属分析をフォローアップすることでした。私が赴任する前に故障を直しておくことになっていた重金属の分析機器は、そのままの状態であり、ついに私の任期中には、修理されることはありませんでした。

停電や断水の多いソロモンでは、精密な分析機器が故障しやすく、故障してもすぐ修理されないことから、JICA 事務所にお願いし、日本から試薬や器具を送ってもらい、シアンや総硬度、残留塩素といった精密な分析機器を用いなくてもできる試験を立ち上げることにしました。シアンは金鉱山の精錬に用いられるので水質汚染事故を起こす恐れがあったので優先項目とし、珊瑚礁の島で硬度が高いと思われたので総硬度を、飲料水の水源は湧水や地下水のため塩素処理しか行っていないので、残留塩素を選定しました。シアンや残留塩素は比色法で、総硬度は滴定法で立ち上げました。両法は化学分析の基本的な方法であることから、今後、カウンターパートが自助努力で分析できる項目を増やしていくことを意図したものです。

真剣に分析するカウンターパート

そして任期中は、水質試験の指導ばかりでなく、セミナーを開催して日本の水道事業や水質管理について講義を行いました。そのセミナーには、試験所の職員のみならず、保健省、ホニアラ市役所、ソロモン水道公社の職員、JICA の青年海外協力隊員も参加してくれました。水質関係技術者の知識の向上を図ることができて、たいそう頼りにされましたよ。（エヘン、エヘン）

セミナーの参加者と

今年４月から、ソロモンにまた９ヶ月来てほしいとの要請がありましたので、今度行ったらあれもしよう、これもしようと思っていましたが、うちの旦那様が、「９ヶ月は長すぎる～。」と悲鳴を上げたので、今回は思いとどまることにしました。

ヌズヌズ雪像作りに協力を！

ソロモンの舟の守り神に、ヌズヌズという神様があります。戦闘に出かける時には、舟の舳先にドクロを抱えた木彫りのヌズヌズ像を掲げますが、平和の使いで出かける時には、鳥を抱えたヌズヌズ像に替えています。

来年の札幌雪祭りには、帰国している青年海外協力隊の OB 達が会場に集結して、ヌズヌズの雪像を作ろうと盛り上がっています。その時には、皆さんも協力してくださいね。

札幌雪まつり見聞

国際雪像コンクールから

向井　博二

２月５日から２月 11 日までの７日間の雪まつりの期間、国際雪像コンクールが開催されていた。大通り西 11 丁目広場では国際本部事務所、休憩打ち合わせブースなどが設置されており、「食の国際交流コーナー」も併設されている。

国際雪像コンクールは、今年で４１回を迎えている。今年の参加チームは、札幌市と姉妹都市である大田広域市(韓国)とポートランド市（USA）のほか、ハワイ、マレーシア、ニュージーランド、シンガポール，タイ、香港、ポーランドなどの国や地域と都市である。

開始初日に国際本部事務所に出向き、状況などの話を聞いてみた。参加各国の参加回数と雪像造りにあたって各々のポリシーについて説明を受けたので、それを紹介する。

参加国の観光宣伝ブース

①　姉妹都市の大田広域市は４回目の参加

雪像名は、「メビウスの地球」で複雑な帯が球体をつくっており、この帯は、地球に住む有機構造物（人間）を表現している。

団員の３名は、彫刻家である。

②　ハワイは１２回目の参加

雪像名は、「IN PLAIN SIGHT　丸見えでも」で、ハワイの森には、多くの愛すべき生物が住んでいます。しかし、隠くれる事がなく、丸見えでも争うことなくやさしく生きているということを表現している。

団員は３名。食にかかわっている人たちで、その中には寿司職人も参加しているという。

③　マレーシアは２９回目の参加

雪像名は、「PROBOSCIS MONKEI・テングザル」でVisit Malaysiaの公式マスコットのテングザルである。水かきを使って泳ぐボルネオ島の固有種であり、自然を大切にしているマレーシアのシンボルとなっている。

団員は３名で彫刻家、室内装飾家である。

マレーシアの雪像掲示板

④　ニュージーランドは２９回目の参加

雪像名は、「Black and Silver・ブラックとシルバー」で、ニュージーランドの国技がラクビーであり、これを代表とするラクビーチームがオールブラックスである。さらに国章

となっているシダ植物が、前に進む象徴の意味を持つシルバーファンで、このブラックとシルバーがこの国のシンボルとなっている。

団員の３名は教師である。

⑤　姉妹都市のポートランド市は２６回目の参加

雪像名は、「Rat are eating my lunch・ネズミが僕のランチを食べている」かわいいコミカルな動物と人間との日常的な表現である。

団員の３名は芸術家および庭園職員である。

⑥　シンガポールは２６回目の参加

雪像名は、「Let remove it・なくしてしまいましょう。」で、私たちの世界の衝突、敵対、侵略、戦争をなくし平和と調和を享受しましょう。ということをシンボル化したものである。

団員の３名は彫刻家、アーティストである。

シンガポールの雪像掲示板

⑦　タイは１８回目の参加

雪像名は「Kingdom of Thailand・水牛は健在」で、タイの農業は古くから水牛でなりたっている。最近は、機械化で水牛の役割が狭まってきているが、しかしながら子供たちにとって（特に地方の子供たち）は、今でも仲の良い友達である。

団員３名は、芸術家である。

⑧　香港は、３８回目の参加

雪像名は「The Jumping Qilin・跳ねる麒麟」で、麒麟は、2,500 年以上の歴史を持つ中国の古代芸術・文化から産まれた伝説上の霊獣である。中国の無形文化遺産として登録されており、人間関係の安定、幸運、公正、知恵のシンボルである。

団員３名は、ホテル料飲部門管理者、キッチンアーティストである。

⑨　ポーランドは２回目の参加

雪像名は「Mother Natur watering valleys in the Karkonosza in Poland・ポーランド Karkonosza 山の谷に水を注ぐ女神」で、女神の持つ水瓶には谷を潤す川の源である命の水が入っている。

団員３名は、教師、記念物保護官、学生である。

なお、雪像は高さ、幅、奥行きともに 3.0 mの大きさとなっている。さらに、大通会場には、雪像製作に参加している国や都市の観光紹介および産業紹介のブースも併設されている。

札幌雪まつりは、冬の間市民が雪と寒さを友達に、厳しい自然と共生しようと始まったと聞いている。そして、それが札幌市民から北海道民へとその輪が広がり、さらに日本全国に広がると同時に、札幌市との姉妹都市を始め世界の人たちともつながり、その輪をますます大きくなっている。

この国際雪像コンクールでは、そのテーマーのほとんどが仲間、自然、平和、幸運、知恵となっている。少なからずこの雪像造りのコンセプトを理解し、雪祭りを機会に言葉を超えた心で話し合いが、よりできるよう期待したい。

北海道インターナショナル協議会（HIC）は今年度も、JICA のベトナムの青年研修を受託

実施したが、国際協力の必要性を会員一同は強く感じている。これらのことと雪祭りを通して、互いに教えたり、教わったりする環境作りが必要不可欠ではないかと痛切に感じた次第である。

参加国の休憩室（国籍別はない）

雪像造りの協力と相談などを担当する実行委員スタッフの詰所

雪像造りの様子
「どこのチームが優勝する」

編集後記

編集後記の記述にあたり、その時の時代背景がどうであったかを思い起こすことができるように、その世相の一端に触れておきます。

平成25年度を振り返って見て、明るく感動し心に残る最近のニュースとして、仙台出身の羽生結弦選手がソチ五輪のフィギュアスケート男子で日本初の金メダルの獲得が挙げられます。それは、アスリートとして血が滲むような汗の結晶だと思います。

一方で、東日本大震災から3年目を迎えていますが、多くの被災地や被災者は復興への道筋が見えない暗いトンネルから抜け出せずにいます。

その中で、このニュースは仙台の人びとや日本中に勇気と感動を与え、被災地の人びとに頑張る勇気を与えました。

彼は、被災地への思いを次のように語っています。被災した人たちを勇気づけたいと思って滑っていたけど、実は自分の方が支えられていた。金メダルは自分だけではなく、応援してくれたみんなで取ったと思っています。金メダリストとして、すべきことも見えてきました。「被災地のことを忘れないでほしい」という思いを伝えるために、これからも滑り続けるつもりです。19歳と非常に若いのに、本当に感動するしっかりとした語らいと感じ入っています。

年度末に発生している忌々しき重大ニュースとして、世界の平和と安定を乱す大きな事件が発生しています。

ロシアのプーチン大統領は欧米による制裁の警告を無視して、ウクライナ南部のクリミア自治共和国でロシア編入の是非を問う住民投票が実施され、95.7%が編入を支持し、住民投票によるロシア編入の承認は確実となりました。欧米、ロシアが互いに経済制裁を発動するなど情勢が緊迫化すれば、世界経済社会情勢の回復に大きな影響を与える忌々しき問題で、さらに新たな冷戦時代の瀬戸際にあり、今後の情勢の動きに目が離せない状況にあります。

我が新組織のNPO北海道インターナショナル協議会（HIC）はどうであったかと振り返って見ますと、いろいろと忙しかったなぁとの思いがあります。

先ずは、北海道JICA帰国専門家連絡会を解散し、その事業を継承する新たな組織として、法人化組織のHICを立ち上げるために、指定都市札幌市から認証を受けなければなりませんでした。

そもそもNPO法人とは何かを知るため一から勉強を始め、設立認証に必要な書類作成、公告、縦覧を経て、法務局で法人設立の登記、設立登記完了届出書の提出を終え、めでたく平成25年4月に事務的には設立を果たしました。

これからが本番であります。この組織を運営するための財政基盤をどうするかであります。事業活動するためには先ず資金が必要となります。前組織と同様にJICAからの支援活動費の予算要求、JICA青年研修事業公募に対する受託による資金確保、その対価としての事業執行のための体制作りによりHIC号が出帆したばかりです。

今年度末の締め括り業務は、新組織の発足に伴う会報誌の創刊号の発刊であります。

創刊号の編集にあたり、新しい編集委員による新体制を曲がりなりにも構築したけれども、いつもながら会報誌の発刊には原稿集めに非常な苦労が伴うのが常であります。会員の皆様には、年度末の多忙な時期に執筆をお願いしたにもかかわらず、会員の皆様から快

くご寄稿に協力していただき、発刊することができましたことに対し、皆様方の多大なるご支援とご協力に編集委員一同深甚より感謝を申し上げます。

次に、創刊号の発刊としての会報誌のネーミングをどうするかを決める必要がありました。会員から良いネーミング募集と賛否を図った結果として、一旦は「HIC NEWS」に決まりかけました。しかし、NEWS とは最新の情報や出来事の報道をお知らせすることであり、年に 1 回しか発行しない年会報としては馴染まないねと言うことから、他のネーミングを再び募集しましたが、その反応が鈍い状況でありました。

そこで、編集委員会で HIC 会報誌に相応しいネーミングとして、新しい組織として生まれ変わるために、また夢を乗せて世界に羽ばたいていけるように「飛翔」とネーミングすることにしました。

今号の掲載内容は、会員の方々の多くが開発途上国の人々を支援する技術移転活動などの国際協力に従事していたことから、その異文化に接してのカルチャーショックや赴任国で新しく得た発想などの経験談を中心とした寄稿文となっています。

また、HIC 会員の皆様には、JICA 青年研修事業とは如何なるものかを理解している人が少ないと思われますので、今後において会員の皆様が本業務に容易に携わることができるようにとの思いから、平成 25 年度に受託した青年研修事業のベトナム農村振興コースの実績を踏まえて、研修業務の公告から応募や業務履行完了まで実施しなければならない実行手順を掲載しました。

HIC の情報提供の一つである会報誌発刊の方法としては、急激なインターネットの発展によりユビキタス情報社会の進展からペーパレス時代を迎えていることを踏まえ、コスト削減や業務の効率化のため、当初は紙ベースではなく CD-ROM に収録して発刊する計画でいました。しかし、会員の中には PC 操作に弱い高齢者も少なくないことから紙ベースで会報誌の発刊することになりました。

今後の HIC の事業戦略としては、開発途上国で国際協力に従事した経験と知識を有している JICA 帰国専門家や国際協力に関心のある有志の体験を活かし、自由闊達に参加できるような組織や仕組み作りを構築して参りたいと考えています。

日本の国際協力の背景として、グローバル化が進展する中で、日本は世界各国に資源や食糧の多くを依存しており、日本はもはや一国だけでは成り立たない状況にあります。

一方、開発途上国の多くは貧困や紛争といった問題を抱え、さらに世界規模での環境破壊や、資源・エネルギー・食糧などの需給逼迫などの様々な社会問題が発生しています。

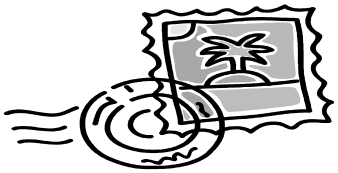
こうした国際社会全体の平和と安定の実現のために、世界各地での紛争の解決、貧困の撲滅および平和の定着に向けて、JICA と協力して開発途上国の人びとを支援する国際協力や地域社会の国際化の浸透に一翼を担うことができればと願っています。逐次、その情報や成果を会報誌に報告して参ります。

今後とも会員の皆様には、HIC の活動に関してご協力をお願いすることになりますが、何卒ご支援、ご鞭撻のほどを宜しくお願い申し上げます。末筆ながら、会員の皆様の益々のご発展とご健勝をお祈り申し上げます。

(熊井敬明)

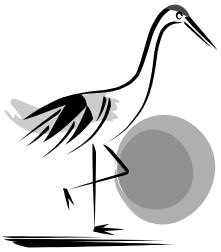
頭の体操「大人の算数」で少しリフレッシュ

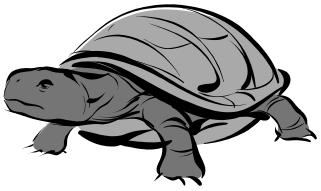
１問　30 円切手と 50 円切手がある。いま、２種類の切手をあわせて 25 枚買って 950 円支払った。30 円切手、50 円切手をそれぞれ何枚買ったか



30 円 15 枚、50 円 10 枚

２問　ツルとカメがいて合計数は 12、足の総本数は 34 本である。ツルは何羽、カメは何頭いるか。





カメ５頭、ツル７羽

３問　ある川の堤は 300m ある。この堤に 20mおきに松を植え、松と松の間に５mおきに桜を植えたい。松と桜はそれぞれ何本必要か。

松の本数 16 本、桜の本数 45 本

「飛翔」ご創刊に寄せて

JICA 北海道（札幌）
専門嘱託　**筧　克彦**

この度の HIC 会報誌「飛翔」のご創刊に対し、心よりお慶びを申し上げます。

私はこれまでの 36 年間に及ぶ JICA 生活と、それに続く専門家稼業の中で、主に中南米を中心に海外赴任生活をしてまいりましたが、海外で暮らすと日本国内にいるのと違い日本が客観的によく見えて来ます。私が海外生活の中で日本を見た時に特に感じたことは、「今の日本はおかしいぞ」と言うことでした。

親が子供を殺したり産んだ子供を放置したり、或いはその逆の現象が起きたり、いじめ自殺が横行したり、つい一時代前には到底考えられないような事象が多発するようになったことに、非常に大きな驚愕を覚えます。

ではなぜそんな日本になってしまったのでしょうか？　巷間ではいろいろなことが言われていますが、私は「子供のコミュニティの崩壊」もその大きな要素であるような気がします。昔の子供を取り巻く社会は、一人で生きて行くことが不可能な社会で、常に家族内や友達関係、学校の中などの社会環境の中で自分の位置を確認しながら生活をしなければなりませんでした。ところが今は、膨大な情報量や最先端技術、核家族化等の中で子供たちは自分の位置を見失い、また自分を取り巻く社会環境が閉鎖的になって孤立化してしまい、「一人でも生きていける」という誤解や錯覚に陥っている気がします。豊かさの裏返しの孤立感が醸成されたのだと思います。ある意味では今の子供たちは可愛そうな気もしますが、他方、こうした子供社会の再形成のために社会の先輩である大人たちがその役目を果たすことが急務であることは言を待ちません。そのためには、社会の中での自分の位置、コミュニティの存在意義、日本の置かれた立場等々を子供たちが再認識する必要があります。

私がお話をする時によく使うキーワードに「我が国が行う国際協力の意義」というものがあります。「これまで日本が受けてきた国際協力への恩返し」「山積する国際社会の課題への取組み」「世界の主要国としての責務を果すこと」「相互依存関係の構築による国家利益の確保」等がそれですが、この「国際協力の意義」を認識することは翻って現在の日本の立場を認識することになり、「日本は一人では生きては行けない」ということを認識しなければなりません。この現実を理解すれば「食べ物を粗末にしない」「エネルギーの節約」「環境保全」「異文化理解」等々の認識が深まり、「相互理解」や「社会の多様性」「多文化共生」等に何の支障もなく入ってゆくことが出来るはずです。

このような私が常に抱いている危機感の払拭に「開発教育／国際理解教育」が不可欠であることはいうまでもありません。私は、子供たちはもとより、子供たちの成長に一番の責任を負う肉親、子供の成長に欠かすことの出来ない教育関係者などが「開発教育／国際理解教育」を通じて上述のような認識を深めて頂ければ、子供社会の再構築の一つの切り口になり得ると信じています。

上述してきたことはほんの一例に過ぎませんが、国際協力の実践経験者の集まりであるＨＩＣの皆さんには、このような国際協力の意義や重要性を踏まえた上で、子供社会のみならず日本の社会のさらなる再構築、醸成に一肌脱いで頂くことを真に期待するものであります。

着任ご挨拶　～よろしくお願いします～

JICA 北海道（札幌）
研修業務課長　**瀧澤　征彦**

本年1月16日にJICA北海道に参りました瀧澤征彦（たきざわまさひこ）です。まずは、「飛翔」創刊につきお慶び申し上げますとともに、拙稿を寄せさせていただけることに感謝申し上げます。

北海道に来る直前は、東南アジアのラオスのJICA事務所で3年7か月勤務しておりました。1月にラオスを離任するときの気温は約28度、札幌に着いたときの気温はマイナス7度でしたので、実に気温差35度でした。しかし、前任者に連れられてサッポロ・クラシックを飲み、北海道の山海の幸を楽しみ、「ここなら楽しく暮らせる」と確信しました。実は、わたしはJICA北海道に着任するまで、生まれてこの方一度も北海道の土を踏んだことはありませんでした。まだ、札幌、江別、千歳以外は行ったことがありませんが、任期中になるべく多くの地を訪れて北海道の豊かな自然と文化に触れてみたいと考えております。

北海道に来る前はラオスで勤務していたと書きましたが、わたしの東南アジア諸国とのつきあいは、1994年からのマレーシア勤務に始まりかれこれ20年になります。20年前のクアラルンプールは、町中が建設現場と言ってよいぐらいごった返していて、マレー系、中国系、インド系の料理の屋台が立ち並ぶ個性的な町でした。ヤオハン、伊勢丹、そごう、といった日系デパートや多くの日系企業が進出しており、成長するアジアを舞台にビジネス展開をする日本の姿がそこにありました。当時、わたしは、外国人向けの日本語学校のマレーシア分校の立ち上げ業務に携わっていましたが、日系企業に就職したい、日本人とビジネス上でコミュニケーションをとりたい、日本文化に興味がある、というマレーシア人や従業員に日本語を習わせたい日系企業が多かったおかげで、生徒数が2年間で10倍になるという大変ありがたい環境でした。有名な日本料理屋の板前さんが日本語学校の生徒さんで、学校に寿司をときどき差し入れしてくれたことなど、楽しい思い出が多い職場でした。

当時のマレーシア首相で国の成長をけん引したドクター・マハティールは2020年までに先進国入りするというVision 2020を掲げて、本当にそうなるのかなと思っていましたが、いまやマレーシアの国民一人あたりGDPは10,000ドルとなり、「町中が建設現場」だったクアラルンプールはしゃれた町に生まれ変わりました。ビジョンを持った指導者が存在することは大切なのだな、と改めて感じる次第です。

2002年から2005年までは、フィリピンのJICA事務所で勤務しました。フィリピン人の明るさ、ホスピタリティは他の東南アジア諸国と比べても独特なものがあると感じました。一方で、地方で仕事が見つからない人々が首都マニラに出てきて形成されたスラム街などをみると、都市と地方、持てる者と持たざる者のギャップの大きさを強く感じざるを得ませんでした。「スモーキー・マウンテン」と呼ばれるごみの山と隣接するスラムが日本のメディアによく取り上げられていましたが、わたしが訪れたのは、それより規模が小さいマニラ西部のスラム街でした。盗電用の電線や盗水用のパイプが張り巡らされた小道を進むと、高さ3メートル以上の巨大なごみの山が現れ、悪臭で吐きそうになりました。スラムの住居をのぞいてみると、多くの家庭にテレビがあり意外に思ったことを覚えています。NGOの方の発案でスラムの幼稚園を支援する案件だったのですが、そもそもスラムは違法、そのスラムが居心地のいい場所になるのは好ましくないので、あまり大規模

に展開しないでほしい、というマニラの市役所の方の意見を聞いて、立場が変われば見方が変わるこの仕事は奥深いな、と感じました。

フィリピンは、日系企業は多いものの、タイやマレーシアほどには日本の文化を現地の方が楽しむ様子が見られなかったと記憶しています。これは、アメリカ文化の影響が強いことが背景にあるのではないかと言われています。アメリカ以外には、中国や韓国の進出も盛んだったと記憶しています。フィリピンの援助窓口の局長の方から「日本の支援は遅いね、最近は中国が早くていいよ」と冗談交じりに言われた記憶があります。援助する側から選ばれる側への変化はこのころにすでに始まっていたのかもしれません。

2010年、わたしの3度目の海外赴任地はラオスでした。東南アジアで最も発展が遅れたラオスは、マレーシア、フィリピンとは大きく異なり、大河メコンのようにゆったりとした時が流れています。「Lao People’s Democratic Republic (Lao P.D.R.)というのが英語表記の国名ですが、口の悪い外国人は、「Lao People Don’t Rush だ。」と揶揄したりしていました。しかし、のんびりしたお人好しの国のイメージとは反対に、存続と繁栄のための工夫が随所に見られます。

ラオス人への外国人の典型的な不満の一つは「主体性がない、自分で物事を決めようとしない」というものです。確かにそのような人も多いのですが、意図的に物事を決めようとしないしたたかさを感じることがあります。中国、ベトナム、タイ、ミャンマー、カンボジアの5か国に囲まれて、どこかに肩入れすると、他国との関係が途端に悪くなってしまう小国では、競合する援助/投資案件がある場合に片方の国が提案したものを選ぶと、もう一方の国と角が立つことがあります。ここで、ラオス人は、「今回はA国が熱心に案件を進め、話をまとめてくれたので受け入れざるを得なかった。ご理解いただき引き続きラオスをよろしく頼む」とB国に対して釈明をするのです。それ以外にも笑顔で八方丸く収める技術には目を見張るものがあります。国民性の裏にある政治的・歴史的背景を理解することが、この仕事を行う上で大事なのだと改めて実感させられた国でした。また、普通の案件なら日本に頼まず、安くできるところに頼もう、という雰囲気は肌で感じられ、ハード整備ときめ細かく息の長いソフト支援のセットといった日本の良さを出した案件を必要があると考えさせられる現場でした。

20年を振り返ってみると、市場や生産拠点としての東南アジアの存在がより大きくなり、同地域の発展を背景に、日本の援助は、してあげる側から選ばれる側に位置づけが大きく変わってきているという印象を強く持ちます。研修事業についても、一流ホテルに宿泊し食事も全て負担してもらえる国の研修のほうがいいのだという意見がないわけではありませんが、待遇より学びや気づき、そして人と人との触れ合いが多く意義深い研修をしたいのだ、という考えの方が増えてきているようです。

そんな声にこたえられるよう、北海道の皆様のご支援をいただきながら、業務に取り組んでいきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

JICA職員の専門に関する私考

JICA 北海道　市民参加協力課
課長　村田　俊一

前の会社に入りたての頃、係長から訊かれたことがある。「村田くんって、旅行、好き？」なぜそんなことを訊くのかなと思いつつも、一瞬自問自答したあとこう答えた。「買い物とか、スポーツとか、何かの目的で旅行することはありますが、旅行自体はあまり好きじゃないかも知れません」。係長はとても満足したようにこういった。「それはいいよ、村田くん、ウチの会社はね、旅行が好きだと自分で旅行しちゃうんだよ」。営業のあいまの時間つぶしに喫茶店に入ったときのことだった。

たしかに、青春18切符を買ったことはなかったし、就職が決まったときに父親から、お祝いに海外旅行でもしてみないかと言われたが、特に行きたくもないと答えた。２３歳で初めて添乗に出たときが、生まれて初めての飛行機旅行で、生まれて初めての海外旅行だった。ずいぶん乱暴な会社があったものだと思われるかもしれないが、ノートルダム寺院にもエッフェル塔にも目も呉れず、観光は現地ガイドに任せて、バスで待機してドライバーと話をしている姿は、お客の目から見たらベテランの社員に映っただろう。

かなり前の話になるが、ラジオを聴いていたら沖縄のハブ博物公園の園長が出演していた。アナウンサーから爬虫類が専門かと訊かれたとき、「専門ではありません。嫌いというわけではないですが、特に好きでもないです。」という答えに続いて「だからうまく行くんだと、思います。私が蛇好きだったらマニアックになりすぎて、一般のお客さんはちょっと、と思われるかもしれません」。

私にも苦い経験がある。今思い起こすだけでも恥ずかしさで赤面するくらいのことである。ある職場で食堂やフロントスタッフからの要望もあって、スペイン語講座を始めたことがある。最初のうちは30人くらい生徒がいたのだが、自分でも気が付かないうちに授業がどんどんマニアックになっていって、気が付けば残った生徒は日本語教師の４人だけというありさまだった。

なるほど、そうなのだ。たしかに現場のスタッフには専門知識や好きでないとできないこともあるが、管理側はその知識が邪魔になることさえあると考える。国際協力の現場もしかりで、どんな分野の事業を行おうとも我々事務スタッフには、専門家にはない開発屋とか援助屋としての知識と経験が必要で、その両方が合体して初めて効果的な協力が生まれるのではないかと、草の根技術協力を担当して、最近つくづく思うのである。

事務所スタッフのつぶやき

国内協力員　**大倉　　綾**

◇　やはり JICA の建物は一般の方には入りにくいのでしょうか？

民族衣装の試着が出来たり、世界の民芸品を触れたり・・・

ロビーではなかなか良い展示をしているのに、いつも人気が無いのが残念です（><）

◇　JICA レストランのランチ、目当てのメニューが食べたくて行っても、大体売切れ・・・。

何故なら JICA の昼休みは開始が 12 時半と一般的な昼休憩よりも遅いから。

12 時開始だと、ランチメニューが選べていいのになぁ・・・。

◇　声が大きいスタッフが揃っている市民参加課（平成 25 年度現在）。

話している内容は廊下を挟んで向かいの所長室まで丸聞こえだとか・・・。

自然と風通しが良い職場になっていますね！

◇　個性の強いメンバーがそろっている JICA。趣味も多彩。滞在経験のある国も多様。

日本人ばかりの事務所のはずなのに、日本とは思えないほどバラエティーに富んでいるな～と感じる職場で、日々業務をしております！

皆さま、今後ともどうぞよろしくお願いいたします！

JICA北海道スタッフ配置図（2014年4月1日現在）

所　　長
松　島　　正　明

札　幌　・　次長	三　角　　幸　子

総　　務　　課	
課長（兼務）	三　角　　幸　子

総務経理	郷頭　圭子

庶務	奈良　匡子

研修業務課

課　　長	瀧　澤　　征　彦

課　長　補　佐	小林　　実
コース担当	三崎　圭美
コース担当	成田　望美
研修監理員配置	小田切清治
ブリーフィング/ＧＯ	苗村正和
研修コース実施準備	

特命事項コース担当	堀本　隆保
コース担当	福地健太郎
コース担当	松中あや子
	東谷あかね
研修コース実施準備	渡海　裕暁
研修員福利厚生/	佐々木準子
研修コース実施準備	

市民参加協力課

課　　長	二　見　　伸一郎

	空席
開発教育支援	東峰　宏紀
（教員研修員）	
民間連携/草の根	大弥　路子
進路相談カウンセラー	湊　　和生
旭川：国際協力推進員	大西　孝規

ボランティア募集/広報（国内協力員）	石崎　貴大
地域交流/草の根	門脇めぐみ
中小企業海外展開支援	筧　　克彦
中小企業海外展開支援	中野　　智

帯広・次長	睦　好　　絵美子

課　　長	小　林　　伸　行

総務/庶務	鳥居　直樹
研修事業	加藤　宏紀
研修事業	西垣美佐子
研修事業	大野　恵子
研修事業	佐藤さおり
研修事業	加藤　光之

調達/施設管理	鈴木　忠徳
研修事業	菅原　清英
研修事業/草の根	村上　峻一
研修事業	大野　恵子
研修事業/草の根	野崎　友香
ボランティア/開発教育	石井　優子
中小企業海外展開支援	町田　俊明

専門家としての国際協力を振り返って

金川　弘司

１．はじめに

昭和 20 年(1945)8 月、第 2 次世界大戦敗戦後に、軍需工場に勤めていた父が、酪農経営を目指したが、牛の分娩や病気との苦悩もあり、高校生の私は獣医師への道を選んだ。

高校・大学・大学院と基礎教育を日本で終えて、昭和 42 年(1967)にカナダに留学し、その後、昭和 45 年(1979)にアメリカへ移った。アメリカでは、医学部産婦人科の研究機関で、「生殖生理学の国際トレーニングコース」に参加し、世界各国の産婦人科医や獣医畜産分野で繁殖に関わっている研究者たちとお互いに切磋琢磨しながら交流することが出来た（表１）。

表１　主な専門分野（牛の受精卵（胚）移植）

S33	帯畜大獣医学科（獣医師）
S37	北大大学院獣医学研究科（修士課程）
S39	北大大学院獣医学研究科（博士課程）
S42	カナダ・オンタリオ獣医科（3 年間）
S45	アメリカ・ウエイン州立大学医学部（3 年間）
S49	生殖生理学の訓練コース；世界最初の牛受精卵（胚）移植の実用化に従事（4 年間）
S50	国際胚移植学会創設（アメリカ）
S52	北大に帰国
S49	牛胚移植の国内および国際的普及活動（現在まで）
S52	JICA、FAO および農水省の専門家（現在まで）
S58	北海道牛受精卵移植研究会の創設
その他	JICA・農水省:牛受精卵移植（ET）訓練コース 1）国内(獣医系大学・都道府県など) 2）国外（中南米・東南アジア・中近東・アフリカなど）

２．ET 実用化の始まり

アメリカで 3 年間の研究者用ビザが切れようとしていた時に、カナダ留学時代の教授から、新しく受精卵(胚)移植(Embryo Transfer, ET)の研究所ができるので、是非参加するようにとの誘いがあり、参加することになった。この新しい ET 研究所とは、牧場経営者、大学教授、投資家など 10 名が出資をして、モダン・オバ・トレンド社(Modern Ova Trends Ltd、MOT）と云う ET 専門の会社を、カナダ・オンタリオ州に立ち上げ、牛 ET の研究と実用化を目指すことを目的とした。

私が MOT に勤務した 4 年間（昭和 49～52 年、1974～1977)は、牛 ET の研究と世界で最初の実用化に向けて昼夜を問わず実験に専念した。この間、毎年 100 頭近い実験牛を使い、胚の回収・検査・移植・保存などの研究と 100 頭近い実用例を手掛けた(図１)。

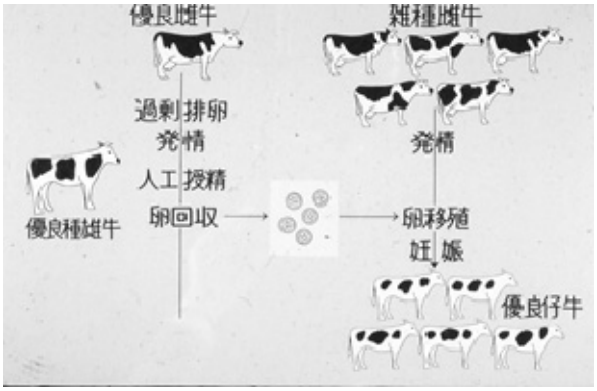


図１　牛の受精卵（胚）移植の概要

図２　1973 年　Maine-Anjou 一度に８頭の優

良子牛

MOT での実用化の成功例が刺激となり（図 2)、カナダ・アメリカには、2～3 年の間に 15 か所の ET 所が開設されたが、それぞれが企業秘密として、胚の回収・移植および保存方法など一連の操作を公表せずに、独自に秘密裡に行っていた。

３．国際胚移植学会の発足

ET センターでは、企業秘密を守るべきという立場の役員たちも多く、彼らを説得して、学会を立ち上げることには、いくらかの迂路屈曲があった。例えば、夜中に他の ET センターの技術者から電話があったりして、過剰排卵のホルモン量とか、回収液や術式など色々な情報交換が秘密裏に行われていた。この様な閉鎖的な状況では ET の普遍的発展は出来ないだろうと、カナダ・アメリカの研究者たちと幾度か会合を重ねた。

第 1 回の会合では、MOT を代表して、私が「回収卵の形態学的考察」と云う題で、回収卵のスライドを見せながらランク付けや移植後の受胎率との関係などを説明した。

表２　IETS 発足後の３大メリット

1	情報公開⇒学会発表・研究誌などの解禁 （Business secret⇒Open infoemation）
2	手術的回収・移植⇒非手術的回収・移植 （ Surgical collection and transfer ⇒ Non-surgical collection and non-surgical transfer）
3	新鮮卵⇒凍結卵 （Fresh embryo transfer⇒Freezing metfod and frozen embryo transfer）

各 ET センターからも色々な発表があり、このような自由な発表が、やがて、ET 技術全般の大きなメリットとなって、ET 発展につながった。昭和 50 年(1975)に、国際胚移植学会（International Embryo Transfer Society, IETS）を立ち上げた。IETS 発足後は、学会発表や関連学会誌（Theriogenology あるいは Reproduction Fertility and Development）などを通じて情報公開が行われ、特に、手術的胚回収・移植が、非手術的方法に、更に、胚の保存も新鮮胚から凍結胚へと切り替わり、急速に ET の実用化が進展した（表 2)。

4. 帰国後の ET 研究と普及

私は、昭和 52 年(1977)に、10 年振りに MOT から北海道大学獣医学部へ戻り、家畜繁殖学の講座を担当し、学生の教育と大学内の運営に参画する傍ら、国内外を問わず牛 ET の研究と実用化の普及に心血を注いだ。

そして、昭和 57 年(1982)には、「北海道牛 ET 研究会」を立ち上げ、昭和 59 年(1984)に「牛の受精卵移植」のテキストを近代出版から発行した。英文では、平成 7 年(1995)に「Manual of Bovine Embryo Transfer」を畜産技術協会から発行することが出来た。これらのことが、ET の専門家として国内外で活躍できる基礎となった（図 3)。

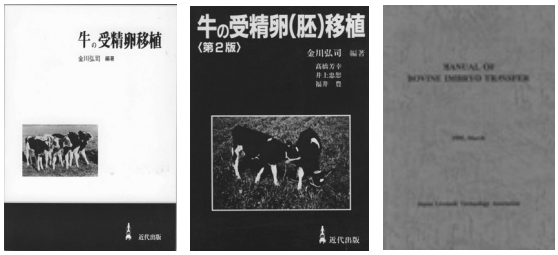


図３　ET 関係のテキスト

その後、国内では 16 の獣医系大学や 47 都道府県は勿論のこと、農水省畜産局と家畜改良センターが、国内での ET 技術開発、平準化、技術者養成および普及を促進するために「畜産バイテク実用化技術開発促進事業」を推し進め、それに関連した委員会の座長や ET 講習会・研修会の講師を 20 年ほど務めた。

また、国外では中南米、中国・韓国を含めて東南アジア諸国および中近東からアフリカまで幅広く全世界的に ET の研究と普及

に寄与できたと自負している。特に、国連食糧農業機関（UN・FAO）に依頼されて、日本代表の専門家として、ローマの FAO 本部で、畜産バイオテクノロジーの国際会議で講演をした。これは、先進国から 10 名、途上国から約 20 名が出席して、先進国で行われている獣医・畜産関係の先端技術を紹介し合い、それらのテーマについて、先進国と途上国の出席者間で、意見交換をする形で行われた。日本からは私が、ET 技術の実情を、カナダ・アメリカからは、後代検定の現状が、ヨーロッパからは栄養や飼養管理のテーマ—などについての発表が行われた。

また、農水省の専門家として、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカおよびカナダの ET 事情調査や国際協力機構（JICA）の ET 専門家として、パラグアイ、チリ、中国に派遣された。

５．ET 以外の国際協力

北大定年前の３年間は、留学生センター長に選ばれた。従って、ET のみならず、文科省の留学生関係の仕事でも、多くの国々に派遣された。中でも、アフリカ・ザンビア大学獣医学部の創設プロジェクト・リーダーを勤めて、10 数回に亘ってアフリカへも出向した。これの中から２~３のプロジェクトを紹介したい。

１）産業動物獣医研修コース

東南アジア数カ国でも ET に関する講演依頼があり、その折に、この様な研修をぜひ日本でも行ってほしいと云う要望が出てきた。帰国後、農水省と相談をしたところ、それでは前向きに検討しようと云うことになり、次の年から白河の農水省の牧場(家畜改良センター)で、外国人向けの人工授精と ET 研修コースの 2 つが立ち上がった。そこに私を講師として呼ぶと云うことで、両方のコースは 10 年ほど続いた。

しかし、私はこれらのコースは酪農王国である、北海道で是非行いたいと強く訴えた。それでは同じ名前のコースは無理なので、幾らか繁殖に特化した形の産業動物の研修コースを立ち上げようと云うことで、スタートしたのが「産業動物獣医研修コース」の始まりである。

今から 20 年ぐらい前の話で、私はまだ北海道大学に在籍をしていたから、北大の教授会に図ったところ、先生はもうすぐ定年で北海道獣医師会へ行くことが決まっているので、北大よりは、北海道獣医師会で行ったらどうでしょうか、と云うことになった。

当時、北海道獣医師会の会長および専務理事に相談を持ちかけたところ、獣医師会の国際化にもつながり非常に良いことだから前向きに検討しましょうと云うことで、「国際交流協力部会」を立ち上げ、私が初代の部会長を務めて、北海道獣医師会でこの様な研修コースを受け入れることになった。

従って、最初の 1～2 年は私の専門である繁殖分野に特化されていたが、多くの会員や関係機関の協力を得なければ長続きさせられないだろうとのことで、徐々に農業団体（NOSAI）の実技実習を取り入れたり、公衆衛生・感染・衛生面など幅広く獣医技術全般を網羅するようになった。また、口蹄疫・BSE・鳥インフルエンザなどの発生もこのコースを後押ししてくれた。以来、18 年間に亘って、この「産業動物獣医研修コース」のコースリーダーとして、お世話をすることになった(表 3)。

表３　(JICA)産業動物獣医技術研修コース
（1997 から北獣会長、1998 北大退官）

1	1996 年（H.14）にスタート
2	途上国中堅獣医師６～９名受け入れ
3	牛の感染症・繁殖に重点、3 カ月コース

4	中南米・東南アジア・中近東・アフリカ 36 カ国、過去 18 年間約 112 名
5	受入先: 北海道獣医師会・北大・酪大・道・家畜保健衛生所・食品衛生検査所・検疫所・農業団体（NOSAI・ホクレン）など

研修を行う側も受ける側も、一人ひとりの力は小さくても、18 年間に亘って、36 カ国、112 名の獣医師がこの研修を受けて帰国し、それぞれ中南米・東南アジアおよびアフリカなどで、獣医療、畜産振興、農業の発展に寄与していることを考えると、それは大きな力となり、大きな国際的貢献につながっていると考えられる(図 4)。

図４　北大・獣医学部での実習風景
（日本人学生と共に ET の実技研修）

２）アフリカ・ザンビア大学獣医学部技術協力プロジェクト

昭和 57 年(1982) に、日本政府は、ザンビア政府の要請に応じて、約 40 億円を投じて、首都のルサカ市のメインキャンパスに獣医学部とその付属施設を建設・整備することを決定した。そして、獣医学部は昭和 58 年(1983) から「ザンビア大学獣医学部技術協力プロジェクト」がスタートし、ザンビア国内における獣医師養成のための唯一の学部となった(図 5)。

獣医学部の発足以来、12.5 年間に亘ってわが国から約 200 名の JICA 専門家ならびに青年海外協力隊員が派遣され、教官として献身的な努力を続けた結果、昭和 63 年(1988) から毎年順調に卒業生を送り出し、ザンビア国内の獣医師数は年毎に増加を続けている。

昭和 57 年(1982) には、わずか 8 名だったザンビア人の獣医師は、現在 300 名以上の獣医師が、主として地方で獣医師として、あるいは畜産の指導者として活躍をしている。また、約 20 名のザンビア人教官・技官・学生たちが研修や留学のために日本国内の大学や研究機関で勉学を重ね、帰国後はザンビア国内の獣医・畜産分野で活躍中である。

平成 5 年(1993)に北海道大学とザンビア大学の獣医学部同士で姉妹提携を締結し、夏休み・冬休みなどには、北海道大学の学生がザンビアを訪問するなどの交流も行われている。さらに、北大人獣共通感染症センターは、ザンビア大学獣医学部をセンターのアフリカの研究拠点として活動をはじめた。それはやがて、FAO に認められて、FAO の研究拠点に格上げされた。そして、平成 24 年(2012)からは北海道大学がアフリカ事務所を開設することになった。

また、日本サイドでは、このプロジェクトに関わった専門家たちによって、「北海道ザンビア会」が結成されて、交流・親善・協力・援助などが続けられている。

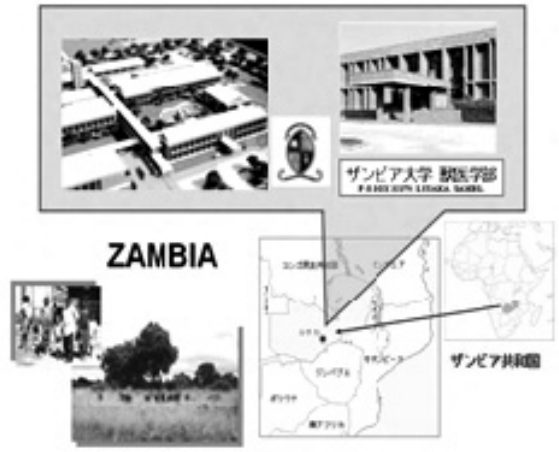


図５　ザンビア大学獣医学部技術協力プロジェクト　S.60,1985~H.9,1997 (12.5 年間)

「継続は力なり」と云う言葉があるが、10~20 年と続ける努力こそが、その中から成果を生み出す力になると思う（表 4)。

そして、北海道大学の中に脈々と流れているフロンティア・スピリットの表れとして、"Boys, be ambitious!"の一節を表 5 に纏めてみた。

表４　継続は力なり！（1985~1997）

1	1982	事前調査
2	1997~2008	JICA 研修員受け入れ（北獣）
3	1999~2003	科研・熱帯地域家畜疾病の診断・予防
4	2000	フォーローアップ
5	2004~2008	国際獣医学教育協力推進プロジェクト
6	2006~2009	第３国・生産技術普及向上プロジェクト
7	2007~	北大人獣共通感染症センター・ザンビア拠点
8	2008~	科研・国際共同研究・野生動物の繁殖
9	2012~	北大・アフリカ事務所の開設

表５　Boys, be Ambitious「少年よ、大志を抱け」(この言葉を初めて記述したのは１期生の大島正健 Boys, be ambitious, like this　old man と言われた)

“Boys be ambitious !”Be ambitious not for money or for selfish aggrandizement, nor for that evanescent thing which men call fame, Be ambitious for knowledge, for righteousness, and for the uplift of your people, Be ambitious for the attainment of all that a man ought to be¨ Message　of　Dr. William Smith Clark(1877)
青年よ、大志を抱け。金銭や私利私欲や、人が名声と呼ぶはかないものに対してではなく、知識や正義や人々の向上のために、そして、人としてあるべき最高の姿に到達できるように、青年よ、大志を抱け。 1915 年サンフランシスコ万博に配布した「北大略史」

私は、本プロジェクトの開始から終了まで、このプロジェクトを支える「国内支援委員会」の委員や委員長として、深く関わり、アフリカへは 10 回以上、足を運んだ。

３）各種青年研修プロジェクト

今まで 20 年間に亘って、「北海道 JICA 帰国専門家連絡会」の会長を務めていたが、専門家の高齢化や会員の減少などもあり、平成 25 年(2013) 4 月からは JICA の専門家以外でも、国際交流・国際協力や地域社会の国際化に関心のある方々にも呼び掛け、だれでも参加できるような「NPO(特定非営利活動法人)北海道インターナショナル協議会」に切り替えて活動を始めた。「北海道 JICA 帰国専門家連絡会」時代から、「NPO 北海道インターナショナル協議会」の 20 年間を通じて、今までに「青年研修」と称して、途上国の青年リーダーを招へいして、青年研修を 10 年以上に亘って、色々な分野の研修事業を続けてきた（表 6)。

表６　青年研修（２～３週間の短期研修）

1	2002	中央アジア・職業教育
2	2003	アフリカ・地方行政
3	2004	トルコ・初等教育
4	2005	中国・経済分野
5	2006	中国・経済分野
6	2007	フィリピン・IT
7	2008	中南米混成・農業、農村開発
8	2009	中南米混成・中小企業振興
9	2010	中南米・地域における観光振興
10	2011	中南米・自然環境保全
11	2012	ラオス・観光と環境保全「
12	2013	ベトナム・農村振興

５．おわりに

30 代の 10 年間、カナダ・アメリカに留学し、そこで繁殖生理学の基礎研究や ET の実用化などを学んだことが、ＥＴの専門家として、やがて国内外の活躍につながったことは幸いであった。

終わりに、今まで留学先で世話になった方々、国内の多くの先輩・同僚・後輩および各国からの留学生や教え子たちの協力に支えられたことに、心から謝意を表したい。また、JICA 北海道をはじめ、「北海道 JICA 帰国専門家連絡会」と「NPO 北海道インターナショナル協議会」の皆様方にも大変お世話になりました。厚くお礼申しあげる。

シニアボランティアの経験

川畑　盛昭

10 年程前、JICA シニアボランティアとして南米のボリビア共和国にて社会基盤整備に係る人道支援、技術移転の協力に参加、経験してきたことを思い出すままに記します。

まずは、ボリビアという国の紹介を簡単にいたします。南米大陸のほぼ中央、ブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、チリ、ペルーに囲まれた内陸国で、ちょうど日本の真裏になります。したがって、時差は 12 時間、昼夜が反対、季節も反対です。国土の面積は、日本の約３倍 110 万㎢²、人口は、日本の 10%にも満たない約 850 万人、地形的には、大きく分けてアンデス山脈を中心に標高 3,000m以上の高原地帯（アルチプラーノ）、1,800mから 2,800mの渓谷地帯（パジェス）、1,000m以下の平原地帯（リャノス）に大別されます。

渓谷地帯の北部、西部は広大なアマゾン低地であり、殆ど勾配のない土地を幾本もの大河が流れ、多くは原生林におおわれています。

ブラジル側のアマゾン河口から距離にして 3,500km から 5,000km もあるのにかかわらず、その標高は僅か 150m から 200mにすぎません。

小職の所属先、ボリビアの首都ラパスは、標高約 3,600m から 4,000m の高原地帯で富士山の頂上とやや同じで、紫外線が強く酸素も薄いものの、気温は夏でも 30 度を超えることは殆どなく、暑さに弱い北海道人としては快適な生活環境でありました。

雨季といっても、一日中雨が降ることは、なく、毎週末のゴルフは、ほとんど予定をクリアーしていたと記憶しています。本業のほうの予定は、狂いっぱなしではありました。

ゴルフと言えば、我が居住区から 15 分程のところに綺麗なゴルフ場がひとつありました。空気が薄くてボールは良く飛ぶと言う事前情報もあり、私にとっては、唯一の楽しみでありました。平成 15 年 10 月 28 日に 現地到着、まだ時差ボケも残る二日後に早速日本人会のゴルフコンペに誘われ参加しました。

10 月末日といえば、北海道は、そろそろ初雪の降る時期ですが、ここボリビアは、これから夏に向かう良い時期でした。日本のように四季は、はっきりと感じませんでした。ここボリビアは、乾季と雨季の２季と言ったほうが当たっていると思いました。

スタート前に自己紹介と初参加のためハンディキャップの申告をと言うことが通例です。一応、日本のハンディー10 を申告して早速スタートしましたが、何と距離は長く難しいコースでありました。長旅の疲れと時差ボケが原因と、日本男児言い分けしませんでしたが、100 の大台を超える大叩き、事前にコースの状況を把握してハンディーの申告をするべきであったと、反省しきりで初の参加から大恥かきました。話がそれました、元に戻ります。

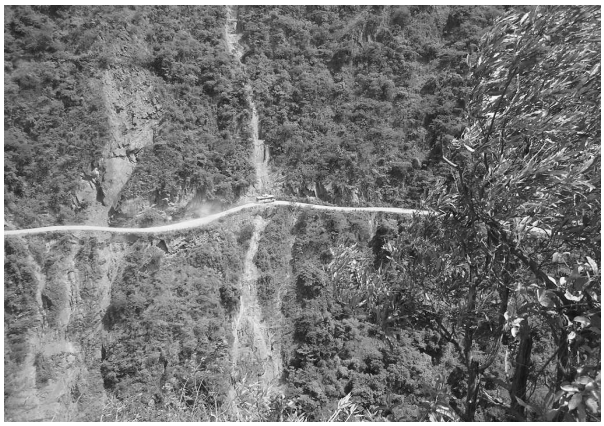
小職の担当する指導職種は、道路建設整備に係る機械維持管理の技術指導でありました。地域住民の基本的な生活基盤である道路の建設、維持補修が、国民にとって、最も重要なことは言うまでもありませんでした。

しかしながら、このことは、この国の問題、課題でもありました。多様な地形の条件などと相まって、少人数の小さなコミュニティーが点在していることから道路の延長は長く、その建設や維持補修コストも非常に高くなっていました。ましてや、中南米諸国一の、いや世界でも有数の最も貧乏な国であるが故に、財政的に困難を極めていました。

日本の道路の状況は、国道はじめ市町村道のすべての延長は約 120 万ｋｍ、ボリビアは、約６万ｋｍで日本の約５％で、しかも道路舗

装率は10%未満であり、ほとんどは良くても砂利道、90%は土道の原始道でありました。

日本との比較は意味のないことですが、国土の面積は日本の約３倍、人口は日本の約８％と言った数字の比較で、その状況をイメージしてもらえると思います。



ユンガス道路雨季には滝になる

輸送手段として、空輸による高コストの方法があるものの現実的ではなく、ボリビアの経済活動の根幹をなす貨客の陸上輸送が、最も重要でありました。その整備状況の劣悪さが、国民の経済効率を劣悪させ、国民の貧困の直接的、間接的な大きな要因であると思われました。

道路に限らず、他の生活の基礎的インフラも甚だしく遅れていて、丁度戦後の日本の混乱期を彷彿とさせるような状況でした。この広大な国土で、なおかつ標高 4,000m から限りなく 0m に近いアマゾン低地まで広範に点在している小さなコミュニティーを網羅する道路と、多くの大小の河川にかかる橋梁の維持管理に、とてつもない時間と経費をかけているのが、現状でした。

そして、10 月から４月の雨季には特に土砂崩れや落石、落橋などの災害が頻繁に発生し、大方の集落は、陸の孤島と化しました。これは主要幹線道路といえども、ひとたび同種の災害が発生すれば、物流は全てストップすることとなり、国の機能も麻痺するわけとなっていました。それは、何度も書きますが、この国の特徴である国土の激しい高低差が、う回路などの代替路の建設をほとんど不可能にしていました。大規模なトンネルや橋梁の建設は、技術的には可能であっても莫大な建設費がかかり、この国にとっては現実的ではありませでした。でありますから、災害発生の度に応急的に復旧させますが、ほぼ毎年同時期に同じ災害が起きて根本的な解決にはなっていないのが実態でした。

これでも幹線道路です

そこで、地域住民の生活を守る重要な役割を担うラパス県道路局（Servicio Prefectural de Caminos）Sepcam に着任しました。

先ずは状況確認です。1990 年頃から我が国をはじめ先進諸国から無償あるいは借款にて供与された建設機械の整備や維持管理を担っている整備工場の設備は、充分とは言えないまでも、40 名程の工員が日々整備稼働していました。主に、土工機械で大小あわせて 600 台強の機材を保有していることになっていましたが、この時点での機材稼働率は 20%ほどで、あとの 80%は 20km ほど離れたモータープールに保管してあったため、保管状態の視察に行きました。

何と、ただの雑品置き場でした（別名機械の墓場と呼んでいる）。いくら国土が広いとはいえ、おびただしい数の機材が平面的に雑然と並んでいました。99%は復元不可能な機材です。1996 年までは、当時の道路公団 SNC（Servicio Nacional de Caminos）が職掌していましたが、同国の地方分権（９県）と同時

に各県の地方道路局にスタッフ、機材とも移管された物で、耐用年数は、とうに過ぎてはいる旧い機材であり、良く観察すると、単なる老朽化によるとは言い難い状態で廃棄されていました。それは分解廃棄された部分品から推測できるものでした。つまり、ほとんどがエンジン、あるいはミッションなど日常的、定期的に怠ることのできない点検整備が実施されていないことに起因していることが、一目瞭然でありました。復元不可能 99%の残りの１%は次のような状況でした。

この雑品置き場「別名機械の墓場」の片隅に、見かけの良い大型ダンプが５台並んでいました。日野自動車製（資料が見つからず年式は不明）です。もちろん、日本からの供与車両です。大型クレーンで周りを整理しなければ動かせない状態です。

はたして、これも同類か？走行距離はどれも３万㎞前後、外観もエンジンルームも見かけは良好です。バッテリーは外してあるため、エンジン始動はできない、頭をかしげていると同行していた CP（カウンターパート）が、後ろから「これを見てくれ」と言いました。

何とタイヤがバースしていました。　消耗部品の供給が財政的に困難であることの察しはつきました。しかし、消耗部品の供与は、JICA としてできないことを承知しているものの勿体ない話であります。おそらく、同じ車種のダンプは保有し、稼働しているので、もしもの時の予備とするか、あるいは部品保管にするのであろうことは、察しがつきました。でも、もしも、このまま何も利用されないまま５～６年の時が過ぎれば、耐用年数が過ぎたとして、このまま放置され、老朽化となるのであろうと考えさせられるものでした。

無償援助の供与機材はいろいろの規制があって、どんなに復元不可能であって、雑品となっていても、保存を義務付け廃棄は許さも、消耗品などの維持費用は自国で賄うこれないこと、どんなに財政的に困窮していて

オイル切れエンジンの状態

となどは、最もなことではあるが、このダンプカーのように替りのタイヤの購入ができなくて、このまま耐用年数がきて老朽化してしまうことは、如何にも勿体ないことです。

一考の余地はあります。可能ならば、このまま日本へ逆輸入して、輸送費とタイヤは自己負担で譲ったとしたら、業者は喜ぶことであろうなと、笑話にもならないことを思ったものです。大体の状況は把握しました。これから２年間のボランティア活動が始まるわけですが、難問が待ち受ける前途多難な予感がしました。

整備工場に戻り CP と打ち合わせ、なかなか意思疎通がままなりません。実は、小生スペイン語には全く自信ありません。赴任前の２週間程の語学研修を受けましたが、全く身についていませんでした。

専門用語は万国共通であろうと開き直って来たものの、そうは問屋が卸してもらえず、加えて、CP はじめ工員は、ほとんど原住民でアイマラ族とかケチュア族とか、少数民族の集りで、それぞれの族は言語族です。それぞれ、訛りのあるスペイン語なのでしょう。全く理解できません。パソコンの翻訳ソフトと辞書を頼りに、文書にしてのコミニュニケーションでは、時間のかかること、この上ないけれど致し方なく大変な苦労でした。

さて、稼働中の機械の状態は如何に！　オペレーターの質は、相当に劣っていると思っていたものの、これ程まではと吃驚です。例えば、山間部で１台のモーターグレーダーによる不陸整正の作業中では、その排気ガスは真っ黒でした。即刻、停止を命じエアークリ

ーナーを取り出して見せました。まるでコンクリートで固めたようになっていました。濾過器を取り換えたこともなく、掃除もしたことないとのこと、言葉が出ません（当然ですスペイン語ですから・・・・笑い）。すっかり、埃を落としてみせて、再始動です。たちまち排気の色は変わって無色透明になりました。オペレーターもCPも狐につままれたような顔をしています。「やってみて、やらせて見せて、ほめてやれ」の言葉はありますが、褒めてやることはとってもできませんでした。よほどの無知か、怠慢か、呆れるばかりでした。これまで５～６人のオペレーターと10台ほどの機械を点検したが、皆同様です。このCPも事務屋であって機械の知識はないようでした。

現在、稼働中の機械は広範囲の現場に散らばっていて、とても全部の機械を点検するなどは、物理的に無理があります。幾ら時間があっても足りないし、身体も耐えられそうにもありません。しかし、オペレーターの教育は１から、いや零から急がねばなりません。墓場に来る機材が増える一方です。CPと打ち合わせをしながら、工程表を作り作業を進めました。小生の資料作りに１ヶ月、このころは丁度２月の終わりで、雨季による災害が多く、繁忙期でした。４月の中旬か下旬までに雨季の終わる頃を見計らって全県のオペレーターを（約60名）集結し、２日間の予定で実施することを取り決めました。

研修中です

しかし、この国では予定通りことが運ぶことはあり得ず、ようやくそのことを認識させられました。先ず、人事異動があってCPが変わります。引継ぎをしないので、最初からやり直しとなります。３人目のCPは、日本で１年だけ勉強の機会があり、片言の日本語で会話ができ、小生の片言のスペイン語を混ぜ合わせて、実に会話はスムースになったことを実感しました。この３人目のCPは、地元の大学教授でエンジニアの国家資格を持っており、インテリですと自称していました。自称なので、これからお手並み拝見といったところでした。

この度、どうしてこのポストに就いたのか、知る由もないのですが、コネ社会なので詮索する気もありませんでした。

この時点でDirector（局長）も交代しているから、やり直しです。工程表は、大幅な変更で７月の実施となりました。しかし、また何があるかわからないため、全く先の読めない国であること実感しました。

つづいて起きたことは、組合が騒々しくなりました。「そんなことは無駄なこと」、「大体オペレーターを呼び寄せる経費はどこから出すのかとか」、「ケチな経費削減のことしか考えない輩ばかり」、まるでJICAで何とかしろと言いたげでありました。お門違いも甚だしいからとぼけていたら、何とか不可思議にも状況は、好転したようでした。

価値観の違いでしょうか、この国で改革とか改善とか言うことは、非常に難しく、これが途上国の途上国たる所以かと、今さらに認識を新たにしているところです。

様々な問題はあるものの、機材の基本的な日常点検や定期的点検の整備の重要性を説いた結果、故障率は減少し、修理費も減少し、稼働率は上がり、耐用年数は伸びるなど、良いことが現れ、経済効果も計り知れなくなりました。

研修会も実施し、つまり『壊れたらどうするかより、壊れないようにどうするか』をスローガンにして考えようと説いて研修会を無事に終了させ、修了証書を渡して、それぞれの持ち場に戻る研修参加者は、それぞれの所属職場に戻っていきました。

難しいことではないないので、皆が理解して実行すれば、劇的に状況は改善されることを期待しました。

早くも任期半ばで１年が経とうとしていました。たまには息抜きしようと、CP を誘って「有名なウユニ塩湖に一泊旅行」に行きました。ラパスから約 600km 離れたアンデス山脈に沿って国道３号線だったかな？ほとんどが舗装道路でした。快適に飛ばして６時間強の道のりでした。「百聞は一見に如かず、聞きしに勝る神秘的な自然」でした。貴重な観光資源となのですが、土曜日にもかかわらず観光客はまばらでした。湖のほとりに小さな集落、ホテルは３軒ほどで、どこも木賃宿みたいな宿泊施設でした。これなら観光客は来ないかもしれない、景色を見るだけで長居のするところとならないと思いました。

翌、日曜日に早々に帰路につきましたが、燃料タンクはから同然となり、ただ一軒のスタンドに寄りましたが品切れでした。店員曰く、「明日の昼頃には入るからもう一日遊んで行きなよ」。冗談じゃないよと心のつぶやきを発していました。

「どうしても必要なら分けてくれるところを教えようか」との話しにすぐ反応し、教えてもらったところは、何とホテルの向かいの倉庫であり、ドラム缶 10 本ほど積んでありました。ホテルの女将が経営者でおりました。これは上手な商売をするであろうと直感しました。

案の定１リッター60 ボリビアノスでの販売でした。ラパスでは 30 ボリビアノスです。あまり観光客は来ないのになんと商売上手と感心しました。

「君は地元でありながら、知らなかったのか？」と CP に文句言っても仕方ありませんでした。

行政がしっかり指導して観光目的に開発して売り込めば、貴重な外貨獲得の手段として有効ではないかと思いましたが、大きなお世話なのでしょう。宝の持ち腐れで勿体ないことと思いました。帰り道、CP のこぼしが始まりました。

セニョール（私の事）の計画、皆良く理解していて、実行しようとしているが、如何せん財政が困窮していて予算がなく潤滑油の購入もままなりません。

しかも、壊れるまで使えの指示は上司の指示であるとのことでした。分からなくもない話であり、つまり無償供与の機材なので壊れたらまた貰えばいい位の考えなのです。目先の小さな節約に重きをおき、将来的なことなど考える社会環境にはないことが、感じとれました。しかし、そうだとすれば余りにさみしい話です。

しかし、放っておくわけには行かないので、翌月曜日に CP を伴って局長に直談パンした結果、すんなり話は受け入れられました。案じることもなかったが、局長の話も内輪と我々の話とを使い分けているのであった。若干の違和感を覚えました。そんな経過があって、油脂類、消耗部品、欠損品などの購入も潤沢とはいかないまでも、スムースな予算付けがなされるようになりました。

しかしながら、この作業は継続して行くことが最も重要なことであって、五月蠅い日本人のボランティアがいなくなったなら、元の木阿弥では何にもならないことです。

最終報告書に記したことで、私たちが残したものが、10 年たってなお続いていると信じています。

ボリビア国の経済発展は、あくまでも、自国の自助自立の精神が最も大切なことであって、

我々も、その一助となるべき意識で携わっています。

ボリビア国民は高い自立心をもち、自力で経済発展をしてくよう願ってやまないものです。

援助がこれからも必要な貧乏な国ではあるけれど、そこはラテン国民、すこぶる陽気で楽しく、歌って踊り、人の良い、幸せそうな人たちです。今も頑張ってもらえると期待しています。

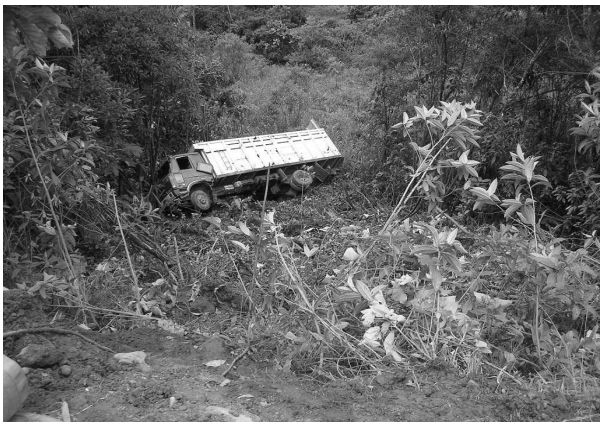
一方、経済発展を遂げた日本は、東北大震災に誘発されたとは言え、明らかな人災と思われる原発事故で大変な思いをしています。経済発展の遅れた国と、経済発展の進んだ国でどちらが、幸せなのか考えさせられるところです。

ボリビアの富士山　イリマニ

交通事故です

楽しいカーニバル

カーニバルは続きます



道が悪く事故も多く発生

家畜が通ります

みんなで協力して橋を渡ります

市場です